

□3月2日説教(隅野徹牧師)短縮版
「彼のための教会の祈り」(使徒12:1～7)

7～11節には不思議で劇的な、天使による脱出劇が記されています。ペトロは天使に導かれて二人の兵士の間からそっと立ち上がります。鎖は手から落ち、服を着て衛兵所をくぐり、町に通じる鉄の門も開いて通りにまで進んでいき、11節には「そこでようやく我に返った」とあります。

天使がどう助けたか書かれた10節までの言葉はおそらく、我にかえったペトロ自身の表現によるものなのでしょう。大切なのはこの救出劇が幻ではなく現実であったこと、また天使による不思議な救出劇の背後に、神の御業があったことを見て取ることです。たまたまとか偶然ではない、明らかに神の御業が働いた。ただそのことを現わそうとしている、私たちはそのようにシンプルに理解できたらと思います。

12節以下の、祈っていた人たちが、ペトロが戻ってきたということをすぐには信じられなかったというエピソードには、一種のほほえましさを感じますが、似たような経験は皆さんにはないでしょうか？必死に祈っていたが心の中では、この願いが聞かれることはないだろうという思いをもっていた。そんなとき、祈っていた願いがかなえられた、という知らせがはいってきた。しかし驚きのあまりすぐには信じるができなかったという経験です。

私には何度もあります。重い病気の方が奇跡的な回復をされたとか、キリストを受け入れるのが難しいと思っていた方が、「洗礼をうけたい」と言ってこられたとか、もう教会に戻るのには難しいと思っていた方が復帰にみちびかれたとか、修理が難しいと思っていた物が、特別な賜物をもった方に繋がったことでもあったとか。聞かれまいだろう、と半分諦めていたような祈りが聞かれたという経験が私にはたくさんあります。その一つ一つの事象にはそれぞれ、医学的、科学的な要因があるのだと思います。それでも私たちが無理だろうと諦めそうになっても、その上をいく「神の業」があることを、祈ることで体感できます。諦めそうになることもあるでしょう。それでも神に心を向けて、祈りつづけましょう。(終)